

西日をより温かな光に変えて室内に呼び込む銅入りガラスの開口、そしてクリスタルのシャンデリア。品よく、モダンな意匠が随所に施された旧岡田邸

街の文化を次世代に伝える 「動態保存」という試み

旭川市で旧岡田邸再生の胎動を聞く

戦前は軍都として、戦後も道北圏の物流拠点として繁栄した北海道第2の都市、旭川。

その栄華の記憶を今に語る旧岡田邸は、建築から70年の歳月を経て、取り壊しの危機に直面していた。しかし、古きよき瀟洒な佇まいに魅せられた多くの人々の熱意によって守られ、来春には新たな再出発をする。

保存・再生までの道のりを、旧岡田邸200年財団の代表理事である高橋富士子さんにうかがった。



文/森廣 広絵 写真/小高 光夫 協力/一般財団法人 旧岡田邸200年財団

「文明」は地域の風土と暮らしに磨かれ
ゆっくりと土地の「文化」に昇華する

旭川の市街地に建つ旧岡田邸は、中庭のノムラモミジが見ごろを迎えていた。アールデコ様式を採り入れたステンドグラス輝く正面玄関、クリスタルのシャンデリア、漆喰の壁、折り上げ天井。そして、随所に遊び心ある意匠を施した和室、優美な弧を描く居間。2年を要し、職人技の粋を集めて建てられた屋敷の隅々に、庭の深紅が染み入るようだ。晩秋は、かつて『紅葉館』とも呼ばれたこの屋敷が、1年で最も華や季節だという。7年前の今頃に解体、売却の危機に瀕していたこの建物と出会いました。品の良い、端正な佇まいを見て、故郷、旭川にも我々庶民とはかけ離れた暮らしがあったことを初めて目の当たりにし、衝撃を

受けました」と、代表理事の高橋富士子さん。

昭和8年、旭川が旧陸軍第7師団の都として隆盛を極めていた時代、この屋敷は誕生した。オーナーは、清酒北の嘗創業者の1人でもある実業家の岡田重次郎氏。木造2階建て、建坪260坪の屋敷は「見積もりのない建て方」といわれるほど贅を尽くし、重次郎氏から正平氏、正雄氏と3代にわたって住み継がれてきた。しかし平成15年10月、屋敷は売却されることになった。「最後の主であった3代目の奥様は、建物を残すことを切望されていました。また、京都で町屋再生に取り組む建築家、谷口一也さんがこの建物の歴史的な価値にいち早く注目し、地域での保存を呼びかけていました。そんな時、私はこの建物と出会ったのです。私自身も今後の人生を豊かにしてくれる新しいライフワークを見つけないかと考えている最中でしたので、運命的なものを感じました」。

紆余曲折を経て、京都の資産家所有となった屋敷の鍵は、高橋さんが預かることになった。それから5年もの間、屋敷を残してくれるオーナー、スポンサー探しに奔走することになる。「個人で取り組む限界を感じました。そこで、旧岡田邸を残すために建築や法律、金融などの専門家を募って『旧岡田邸200年プロジェクト』を立ち上げ、会議を重ねて保存のための知恵を出し合いました」。並行し

- 1 特注のステンドグラスが美しい正面玄関。皇族を迎え入れる時など、特別な日のみ使用されたという
- 2 磨きこまれた艶やかな廊下を歩くだけでも、どれほど大切に住み継がれてきたかがよく分かる
- 3 モミジの紅が染み入る1階の縁側。来春には、隣接する大広間をリノベーションし、庭の季節の彩りと手打ちそばが楽しめるようになる
- 4 優美なアールを描く窓辺が印象的。活動に賛同した方々が岡田邸をより美しく飾るため、ボランティアで花を生けてくれる



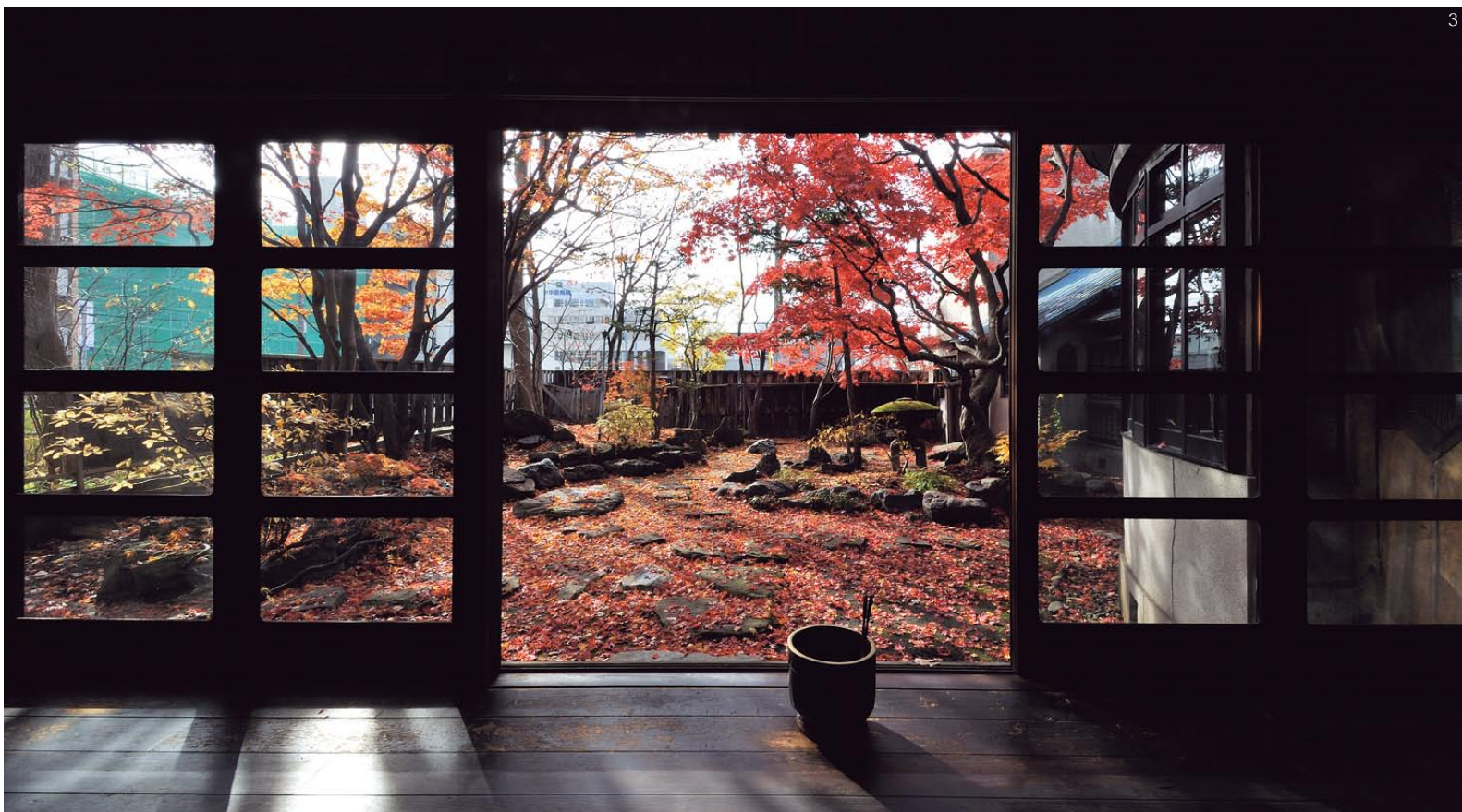
建物にしなければいけません。また、古い建物は使えば使うほど、美しくなります。このため、私たちはこの建物の呼吸を止めず、動態保存という形で保存し続けることにこだわっています」

来年3月、邸内1階の和室が装いも新たに、蕎麦店として一般に開放される。サミット開催で注目されたザ・ウインザーホテル洞爺内にある蕎麦店「達磨」で店主を務めた齋藤弘文さんが、江丹別産や幌加内産の地粉を使い、自慢の腕を振るうという。また今後、2階の座敷を活用して、予約制の日本料理店を開く計画も温められている。店舗の設計、監修は建物保存に奔走した建築家、谷口さんが担当。屋敷の趣を生かしたしつらいに生ま

れ変わらせるといふ。

「この建物には戦前戦後の文明の最先端が詰まっていますが、一般庶民が目当たりすることはありませんでした。これからは、多くの人々に往時の雰囲気を楽しんでいただくことができます。やがて、文明は地域に溶け込み、旭川ならではの文化として豊かに醸成されていくことでしょう。これこそが、この建物を残していくことの最終的な意義だと信じています」

旧岡田邸の中庭といえは、キタコブシの大木もモミジと並ぶ名物だという。春浅い庭に根を張る古木が白い大輪の花を咲かせる頃、古きよき昭和の邸宅は、さらなる輝きをまとうことだろう。



て、本格的な建物調査や同志を募つてのお掃除会、セミナーを開催。市民活動チームも設立し、定期的に建物の一般公開を行い、旧岡田邸の魅力を広く旭川市民にアピールし続けた。

昨年10月、プロジェクトチームは一般財団法人に転換。「さまざまな学びと話し合いから、次世代を見据えた保存のためには財団の責任のもとに、土地建物を買い取り、建物を再生していくのが、最善策と考えました」。この財団化によって、活動メンバーは、札幌から旭川の企業経営者などを中心に再構成。22の個人、団体が、設立資金の寄付を旭川市民に呼びかけた。「こうした地域の宝物は、意志を強く持つて残さなければ、未来に残せま

せん。地元である旭川市民が誇りに思うことが、建物の未来を支えることになります。また、その想いが次世代の担い手をも育ててくれることでしょう」。

運営メンバーの熱い想いと地道な活動が実り、今年5月に念願だった旧岡田邸の買い取りが実現。この冬、旧岡田邸には大規模な修復工事が施され、来春からはより開かれた地域の財産となる。改修工事は、屋根の葺き替え、天井や床、建具の補修、窓の交換、暖房設備の新設など多岐にわたる。新木造住宅技術研究協議会（新住協）旭川支部の会員企業がチームを組んで、補修工事を行う。

「旧岡田邸を200歳まで残すためには、社会的に自立して、生き続けられる

